「石垣原合戦」特集記

「石垣原合戦」の実像を探る

緑ヶ丘町　三重野　勝　人

はじめに

西暦一六〇〇年九月一三日午後、別府市の石垣原を中心に戦われた「石垣原合戦」については、合戦そのものに限らず、それに至るまでの大友義統の足跡についても、出典・史料によって記録・記述が相違している場合が多く、実像を明らかにすることを非常に困難にしている。

このことは、当然のことながら、それらに依拠する研究論稿・著書の内容にも少なからぬ影響を与え、郷土史愛好家の間の事実認識に混乱をもたらしている。因みに「石垣原合戦」について記した過去の主要な論稿と、各論稿が依拠した主な出典・史料を瞥見すると次のようである。

(1)『大分連隊区管内に於ける郷土戦史の研究』（帝国在郷軍人会大分支部昭和二年）『増補大友興廃記』

(2)『大分の歴史』（4）（大分合同新聞社一九七七年）『大友家文書』

(3)『大分県史』中世編Ⅲ（大分県一九八七年）『清正勲績考』・『増補訂正大友史料』

(4)『別府市誌』（別府市一九八五年）「古屋文書」・『松井文書』

＊『別府市誌』は古屋・松井両文書を引用しているが、石垣原での具体的な戦闘場面については「古屋文書」（南立石古屋家蔵）に拠っている。

合戦の地元、別府市の郷土史研究会「別府史談会」の会誌『別府史談』には、合戦に関する史料が、会員や郷土史研究家の手によって紹介され、「石垣原合戦」解明に大きな役割を果たしている。ことに佐藤暁氏「松井文書『立石一件』」（別府史談）第七号）、入江秀利氏「書簡が語る真相松井・大友の立石合戦」（同第十三号）、古屋文書「石垣原合戦覚」を紹介した安部和也氏の「『石垣原合戦日記』古屋家文書」（同第六号）などは、古文書を解読し、必要に応じて解説などを付して、郷土史愛好家の学究心に応えている。

また戦跡の紹介では、矢島嗣久氏の「石垣原合戦の史跡について」（同第五号）がある。本稿は、このような研究史料に加え、古地図なども紹介した大分県先哲資料館編「戦場の風景―大友氏の合戦を読む」（平成一二年）、前記『郷土戦史の研究』、貝原益軒著『豊国紀行』などを援用、また合戦に至る歴史の流れの記述は、『大分県史』（中世編Ⅲ）の橋本操六氏の論稿に依拠した。

一　文禄の役と大友氏断絶

文禄の役（一五九二）と大友軍の失態

合戦の主役大友義統は大友宗麟義鎮（よししげ）の嫡子、母は奈多八幡大宮司奈多鑑基（なだあきもと）の娘（田原紹忍（じょうにん）の妹）であった。初名は足利最後の将軍義昭（よしあき）の諱（いみな）を受け「義統（よしむね）」とし、一五八八年には豊臣秀吉の一字を受け「吉統」と改めた。

一五九〇年全国統一を達成した秀吉は、一六万の大軍を動員して朝鮮に侵攻、文禄・慶長の役（九二年～九七）の戦端を開いた。大友義統は、三番備（そなえ）の黒田長政配下で、六〇〇〇の豊後軍を率いて出兵し、平壌（ピョンヤン）まで進攻した小西行長軍の後衛として、大同江南方の黄州・鳳城に布陣した。

一五九三年一月、明の援軍二〇万が小西軍を攻撃、窮地に立った行長は、黒田・大友・小早川に救援を要請した。この時義統は

黒田陣で軍議中で本陣に不在、現地大友軍は小西戦死と誤認して黒田陣に退却した。このことが大友氏改易（所領没収・お家断絶）の原因になったのである。

大友氏改易と義統主従

秀吉の示した義統改易の理由は六ヵ条からなるが、①戦況未確認、②しかも敵地での退却は前代未聞、③豊臣の顔に臆病疵をつけたとの主理由の外、過去の失態にかかわる次の三ヵ条が挙げられている。

(1) 島津氏との豊薩戦争の際、秀吉の到着も待たず、戸次河原（大分市）の戦いで島津軍に敗北、府内、高崎山城にも篭もらず竜王城・妙見城（宇佐郡）まで逃亡した。

(2) (1)の失態にもかかわらず、秀吉は、多くの反対を抑えて義統に豊後一国を安堵した。

(3) 将来の貢献を考え、秀吉は「吉」の一字を義統に与え豊臣一族の扱いにした。

このように、朝鮮での失態に関係のない過去の事例まで引き合いに出して、厳しく義統の失態を断罪しているのは、小西らの報告が義統にとって相当に苛酷な内容になっていたことを連想させる。

義統主従に対する処分は、次のようであった。

(1) 義統は毛利輝元預け（山口本国寺幽閉・出家し宗巌と改名）。のち佐竹義宣（水戸）預け。

(2) 子息義乗は加藤清正預け。のち一五九四年徳川家康（江戸）預け。

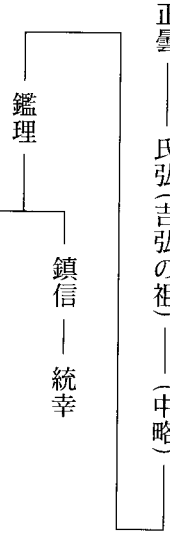
(3) 家臣団は黒田孝高、長政以下数名の大名預かり。

＊このとき田原親賢紹忍、宗像掃部鎮続は竹田中川秀成与力待遇。

吉弘氏と吉弘統幸

石垣原の合戦で義統に殉じた吉弘統幸は、この時黒田孝高（中津）のもとに身を寄せ、のちに統幸の従兄弟にあたる柳川城主立花宗茂をたより、知行二〇〇〇石を付与されている。

吉弘氏は、大友第一代能直の第一二子泰広を祖とする大友田原家の流れを汲む。南北朝（一三三六～九二）期に活躍した氏弘の時、現東国東郡武蔵町大字吉広に所領を分与され、吉弘姓を名乗るようになった。楽庭八幡社に伝わる吉弘楽は、この氏弘が、戦勝と五穀豊饒を願って奉納したことに始まるとされる。参考までに吉弘家の略系図を示すと次のようである。



二　大友家再興と義統の賭け

大友義統赦免と福原直高（堯）改易

一五九八年秀吉が没した。これを機に、朝鮮民族の抵抗に苦戦を強いられていた日本軍は撤兵し、文禄・慶長の役に終止符が打たれた。

秀吉の死後、遺子豊臣秀頼の後見人として政局の指導権を握った家康（伏見在城）の執政下で、義統は赦免され自由の身となった。この背景には、義統除国後、後水尾天皇の乳母となった妻少納言と姑（後陽成天皇の大乳母）の尽力があったとされるが、政治的には、朝鮮出兵中の豊臣政権の諸措置（石田三成ら文吏派主

導）に不信感を募らせていた武断派（加藤・福島・黒田・細川・池田など）が、当該措置の再吟味を要求したことが影響したとも云われる。

吟味には大友氏改易の経緯も当然俎上にのぼったものと推定される。豊後検地後、臼杵→府内→杵築を転々支配した福原直高（堯）が、一五九九年に家康によって改易されたこともその結果であろう。福原は、石田三成の妹婿でもあるが、慶長の役では軍奉行として諸軍を監察する任にあり、武断派の諸将と厳しく対立した人物とされる。

豊臣・徳川開戦と義統の帰趨

赦免された義統は、一五九九年四月に水戸を発ち、江戸牛込の長男義乗の元に身を寄せた。ついで七月には上洛して伏見城で家康に謁見したとされるが、ここでは当然のことながら、大友家再興のことなどを懇請したものと推定される。

翌一六〇〇年四月、義統は豊臣の武将増田長盛の配慮により大坂天満に居を定めた。それまでは改易された大名の宿命からか住居も定まらなかったと推定されるだけに、増田の支援は想像される豊臣方の肩入れと相俟って義統の帰趨に少なからぬ影響を与えたものと考えられる。

義統が天満に居を定めた翌々六月、徳川家康は、石田三成と密約し会津に挙兵した上杉景勝征伐のため伏見城を出陣した。その翌七月には石田三成が家康の留守をねらい伏見城を包囲、八月一日にはこれを落城させ、ここに天下分け目の関ヶ原の戦の幕が切って落とされた。

このような政治情勢の急激な展開の中で義統は、大友家再興の命運を豊臣・徳川のいずれに賭けるかの厳しい選択を迫られた。

当時の義統の置かれた状況はどうであったのか。江戸にあった子息義乗は、家康の会津征伐に従軍して旗色を鮮明にしており、義統自らは家康主導の政権下で赦免され、家康の大友家再興にかかわる沙汰も受けていたものと推定されるから、義統の帰趨はまずは徳川方と見るのが妥当であろう。他方で義統は、増田長盛らを介して豊臣方（石田三成ら）の援助も受けていたと推定されるから、家康の会津征伐出陣→伏見城攻防→落城という事態の急展開の中で、浪々の身として採る選択肢は、おのずから二者択一という限られたものとならざるを得なかった。軍事力皆無の現状では、豊臣方帰属に命運を賭ける以外にない。万一不都合な場合は、徳川帰属の子義乗に大友再興の夢を託す。当時の多くの大名が採った生き残り策であるが、さして無理な推理ではなかろう。『清正勲績考』（『大分県史』中世編Ⅲ）に記す次の一文も、信憑性の高いものと考えられる。

其ノ頃前ノ豊後国主大友左兵衛義統浪々ノ身トナリ居リシヲ招キ、石田三成相謀リ本領ヲ申シ与ヘ、古ノ浪人ヲ召集メ豊後、豊前ノ間ニ相働キ九州ヲ討静メラレヨト下知ス、大友喜ビ領掌シテ諸浪人ヲ駆催シ近々豊後ニ下ラント議ス。

＊註・本領＝歴代大友氏の領地豊後　・下知＝命令する
・領掌＝聞き入れる　・駆催＝駆り集める

豊後諸大名の勢力関係

一六〇〇年八月、義統は大坂を後にして豊後に向かった。それは前記『清正勲績考』に記す通り、「古ノ浪人ヲ召集メ豊後・豊前ノ間ニ相働キ九州ヲ討静」めるためであった。

両陣営の、豊後における勢力配置は一部を除き明確ではない。松井康之の、主君細川忠興宛書簡に拠ってA表を作成してみた。豊前は、一五八七年に黒田孝高（如水）が中津一二万石に封ぜられ、八九年には長政が一八万石に加増され家督を相続していた。

豊前全体の情勢は、小倉に豊臣方毛利勝信（一五八七～）、中津に徳川方黒田如水（八七～）が盤踞して相抗していた。義統の「豊

後・豊前ノ間ニ相働」くとの役割は、小倉の毛利と組み中津黒田

《A表》▲＝徳川方　●＝豊臣方

大名	所領	旗色	摘要
中川秀成	竹田	▲	家康が豊後在留を命じる。
松井康之	杵築	▲	一五九九年福原直堯闕所→一六〇〇年家康が細川忠興（宮津）に速見・湯布院六万石を付与する。
太田一吉	臼杵	●	
毛利高政	隈府（日田）	▲	一五八七年領有？→一六〇一年佐伯転封
早川長敏	府内	▲	一六〇〇年改易
竹中重利	高田	▲	のち府内へ
垣見家純	富来	●	
熊谷直陳	安岐	●	

を挟撃して豊前・豊後を配下に収め、さらには肥後熊本の徳川勢加藤清正を筑後・肥前・薩摩と連携包囲するという豊臣方の戦略より出たことであろう。

しかしこのような豊臣方の戦略に対し、家康もまた豊後に徳川のクサビを打ち込むことを忘れなかった。

豊後では、既述のように、一五九九年、杵築の領主福原直高（堯）が改易され、領地は闕所となっていた。一六〇〇年二月七日、家康は豊後速見郡約五万石・湯布院約一万石を、大坂表の賄料として丹後宮津の領主細川忠興に与えた。忠興は、翌三月三日に家臣松井康之・有吉立行を城受け取りに派遣して支配体制を整えた。この細川勢の豊後進出は、A表に示したような勢力関係形成に大きな影響を与えたが、義統の豊後下向もまた、これに劣らぬ役割を担ったものであった。

義統豊後に下る

義統の豊後下向は、一六〇〇年八月と推定されるが、大坂を発つ義統には、秀頼から「具足百領・長柄槍百本・鉄砲三百挺・白銀千枚・馬百疋」が贈られたという。

義統の豊後下向の報は瞬くうちに中津の黒田如水や義統の旧臣のもとに届いたのであろう、途上周防上関（山口県）に寄留した義統のもとには、黒田如水が、義統の元小姓大神大学に使者宇治勘介を案内させて接触し、徳川方への加担を勧めた。また柳川（立花氏）にあった旧臣吉弘統幸も、江戸の義乗の元へ赴く途上に上関で義統に謁見し、徳川助勢の道をとるべきことを進言したという。しかし義統の意志は変わらず、統幸は旧主と共に豊後に下る。

上関を発った義統主従は、進路を豊後浜脇村（別府市）に向け「（九月）**八日晩熊谷城・懸樋城之間へ舟をつけ、其夜木付（杵築）の沖を通、高崎表ニ懸仕、九日の朝、立石へあかり陣取**」（松井康之、有吉立行連署状案八代市松井文庫蔵・以下「連署状案」）をした。文中の熊谷は安岐城主・熊谷直陳、懸樋は富来城の垣見家純をそれぞれ指し、いずれも豊臣方であった。

三　立石布陣

要害の地立石布陣

立石に入った義統軍の布陣について「石垣原合戦覚」（古屋文書）は次のように記している。（句読点は筆者）

一、（前略）大友左兵衛頭吉統、防州山口ヨリ進発、従大畑乗船、九月九日豊後国浜脇浦ニ着船、同日夜五ッ時立石江御入陣、即、本陣立石邑古屋園ニ有合之宅ヲ陣屋トス。

一、吉弘嘉兵衛、同村坂本ト云ニ陣ヲ居、即、有合之農家ヲ陣家トス。
一、宗像掃部者、同村御堂ノ原ト云ニ陣ヲ居、是茂有合之農家ヲ陣トス。

この史料により、義統・吉弘・宗像の主陣屋のおおよその位置が分かるが、現在の位置で示せば、ホテル杉の井諸施設の並ぶ朝見川断層崖上の高台に展開している。本陣は古屋園の天満社境内、吉弘陣は〝みゆき坂展望台〟から紫雲荘にかけての坂本の高台、宗像陣は御堂原の高速道高架橋周辺に設営された。それぞれ別府市教育委員会の史跡指定表示が建てられている。

この台地からは、黒田・松井勢の布陣した実相寺・角殿山（角山・現ルミエールの丘）が眼下遥かに一望出来るのみならず、吉弘陣からは、府内↓銭瓶峠↓浜脇村（別府市）が一望でき、三陣屋全てからは、これに連なる豊前街道内陸路線、並びに豊前街道海沿い路線も視界に収めることが可能であった。

台地南の山際は、朝見川源流が東西に深い渓谷を穿って険阻な天然の堀をなし、また宗像陣屋から西に遡ると、道は、後述のように大宰府官道＝両筑街道へと連なっていた。これから見ると立石布陣は、事前に豊後の旧臣とも緊密な連絡を取り、持久戦をも視野に入れた戦略的な配置であったとも考えられる。

義統布陣に応じて旧家臣を中心にどれだけの兵力が結集したのかは定かではない。浜脇到着から合戦まで僅かに三、四日では、千人を超える兵力結集は困難であろうというのが大方の見方である。旧臣の中では、田原紹忍と宗像掃部が、徳川従軍を申し出て、加藤清正に誓紙を、中川秀成には妻子を人質に出して忠誠を示したが、事実は義統の下に走り、中川公預かりの旗・差物を多数偽作し、中川の大友合流を吹聴して波紋を広げている。

四　豊後大友軍道、別府路線

ここで別府市域に属する当時の道路網について概観しておこう。大友時代の道路は、主に軍道として整備されたと言われる。『別府市誌』（昭和八年刊）・『大分県史』近世編Ⅳによれば、一七、八世紀の別府市域にかかわる主街道は次のようであった。（筆者註↓当時の地名は、所によってはその属する現市町村名に改めた）

(1)　両筑街道

＊南立石（堀田）――鳥居――大分市（府内）――挾間町――湯布院町――九重町――玖珠町――日田市――筑後・筑前国

(2)　豊前街道

大分市（府内）――銭瓶峠――赤松――浜脇――別府（ここで①内陸②沿海両線に分かれる）

①　別府――鉄輪――十文字原（以上別府市）――安心院町――宇佐

②　別府――平田――里屋――古市――小坂（以上別府市）――豊岡――鹿鳴越――山香野原――立石――宇佐

以上の内、豊前街道内陸線は、別府市域では野口原（別府駅西北）から鉄輪・明礬へと石垣原＝鶴見原を南東から北西に貫通し、沿海線は海岸寄りに石垣原を南北に横断する。

両筑街道へと連絡する堀田－鳥居－湯布院線は、旧大宰府官道にあたるとされ、九州横断道路・見返坂直下堀田から朝見川源流の谷間に沿い、現一気登山道の対岸部を南に遡上し山道に入る。またこの道は、見返坂直下から北にも伸び、扇山の裾を辿って小倉で豊前街道に連絡する。

貝原益軒と「豊後速見郡石垣原図」

石垣原合戦時の別府市域道路網を示す今一つの史料に、筑前黒田藩医貝原益軒の添書のある「豊後速見郡石垣原図」（元禄七年《一六九四》、以下「石垣原図」）（津久見市蔵）がある。添書は四行書きで次のような文からなる。

右石垣原圖者元禄七年四月／十三日予親游觀於彼地所／令衣笠半助描之也／元禄七年十月朔日／貝原篤信書

（右石垣原図は、元禄七年四月十三日、予が親しく彼の地所を游観し、衣笠半助をして、之を描かしむなり　元禄七年十月朔日）

同じ「地図」を模写したとして、『大分聯隊区管内に於ける郷土戦史の研究・第一輯』（昭和二年帝国在郷軍人会大分支部刊）に掲載された「豊後国逸見郡石垣原圖」より書き写したとされる「石垣原古戦場見取図」（上段掲載・以下「見取図」）には、「添書」が次のように記されており、津久見市蔵のものと比較すると傍線部分が異なっている。

右豊後国逸見郡石垣原図者／元禄七年四月十三日貝原篤信／親游觀於彼地而全（令の誤記？）衣笠半助描之也／元禄七年十月朔日／貝原篤信書

地図内の説明も後者が詳しく、津久見市蔵の地図とは別の地図

を模写したのではないかと考えられる。しかし、地図そのものは両者とも酷似しており、便宜上本稿に掲載して検証の資とする。

「豊後速見郡石垣原図」・「石垣原古戦場見取図」に見る別府市域の道路網

『大分県史・近世編Ⅳ』には「豊前国絵図」（福岡県立豊津高校蔵）と「豊後国絵図」（市立臼杵図書館蔵）が援用されているが、これの製作年代は元禄一四年（一七〇一）で、「石垣原図」が作られた元禄七年（一六九四）と時間的な隔たりは殆どない。前記「豊後絵図」と「石垣原図」・「見取図」を対比してみると、別府市域にかかわる「豊前道」がほぼ同様に描かれている。これからすれば、後者の二地図は可成正確に当時の別府道路網を伝えていると見てよく、これに描かれた「豊前道」以外の道路網も十分信用に足るものと考えられる。

次にその道路網を紹介しておこう。（ナンバーは地図上のものを指す）

③は、鉄輪村から実相寺・角殿山間の間道を通り、現実相寺サッカー場前を西上する道路との交差点付近から西南に山の手に向かい、古戦場橋（西別府病院南側）付近を経て南立石板地へ達するものである。そこから朝見川断層崖を上ると立石本村の大友義統の陣所に至り、さらに西上すると宗像掃部の陣屋に至る。

④は、別府村の南縁を朝見川に並行しながら西上し、坂本村などを経由して③の道へと連結する。

①②は、豊前街道内陸及び沿海線

この内③④の両道は、合流点上手で堀田－鳥居線へと連絡し両筑街道へと連なる。

以上道路網について概観したのは、石垣原合戦の際の兵員の移動や戦闘に、この道路網が大いに利用された形跡があること、また大友方が布陣に際し、道路網の戦略的重要性を十分に考慮したと考えられるからである。

五　石垣原の合戦

東軍拠点木付（杵築）の動静

石垣原での攻防について述べる前に、一六〇〇年二月に細川忠興領となり、三月、家臣松井康之らが入城し、豊後における徳川方の拠点となった杵築（木付）の動静を「松井文書」でたどってみよう。

㋐　四月一五日、細川忠興自身が領内巡視に訪れ、二四日には佐田（安心院町）で黒田如水と会談し、予想される豊臣・徳川全面衝突の際の豊後における対応策を話し合った。二六日に上杉景勝謀反の急使が杵築に到着し、忠興は急遽上杉討伐のために東上した。

㋑　八月二八日付け、大友義統豊後下向を伝える加藤清正（肥後）の書信を受けた杵築では、その忠告に従い領内の庄屋や頭百姓らを人質として城内に拘引すると共に、城の防備を固め襲撃に備えた。同日杵築からは、当面している豊後の諸情勢を伝える書信が主君忠興宛に発せられた。書信の主な内容は次のようであった。

(1)　大坂方の使者・太田隆満（臼杵・太田一吉の子）が杵築城受け取りに来城した。

(2)　太田父子の深江（日出町）の古城入を防ぐためこれを破壊した。

(3)　義統が杵築城を与えられ中国まで下向した。

(4)　義統が臼杵・府内・熊谷（国東安岐）・垣見城（国東富来）の何れかに入城、木付攻めが予想されるが、人質を取り、城を死守する覚悟である。

(5)黒田如水より大筒三丁、援軍の約束があった。加藤清正より兵糧弾薬が届いた。

(6)十八日に加藤清正が毛利の上洛要請を拒否した。

(1)、(2)について、松井・有吉は「**不及返答なけ返し、重而使被越候者、首を可切由申**」しわたし（「連署状案」）、強硬に要求を拒んでいる。

この他に、杵築と意を通じる豊後国内の大名領主の情報を伝えているが、それによれば、当時杵築に意を通じている領主は、竹中重隆（高田・病気中）、早川長敏（府内？・丹後細川攻め）、毛利高政（日田・丹後攻め？留守居疎通）とし、中川秀成（在竹田）は中川長祐が大坂に上ったと告げている。

(4)の人質の件は、旧領主大友義統の立石布陣に近郷の速見郡農民らが助勢することを恐れた松井らが、加藤清正の助言もあり大友方に先手を打ったものである。これは次に述べる大友方の杵築城攻撃の引き金にもなった。

木付城攻防戦

杵築城の攻防については、「連署状案」に次のように記している。

当郡庄や共人質丈夫ニ相示し、とかわニ小やをかけさせ置申候処ニ、面々持口へ吉統（義統）者引入、町を焼申候を○松井者取合（中略）鑓を入、左右者共討捕、町ノ上ノ高ミへ追上、（中略）大筒にて放、其外○魚住組鉄炮共にて打立申候条、手をい共ノ首を我と取候て敗軍仕、其日ニ立石迄引入申候事、

この攻撃は吉弘統幸らが指揮し、九月十日夜敢行された。統幸に従ったのは岐部玄達・吉弘七左衛門・鉄砲頭柴田統生と雑兵数百人で、人質として二の丸（百姓丸）にあった野原太郎右衛門の内通により、町屋に火がかけられ、払暁から白兵戦となった。このほか松井康之は杵築城の防衛線たる「**相原山ニ伏勢ヲ置**」き、大友方の人質奪還第一陣「**柴田小六運野天助両人**」を「**討死**」（「古屋文書」）させたともいう。相原山は日出町大神と杵築市境に位置する。

杵築城攻防戦の結果は、柴田統生の戦死などもあり、史料が物語るように大友方の敗北に終わった。この攻撃は、人質の奪還は勿論であるが、出来得れば杵築城を攻略して大友方の力を誇示し、動揺する豊後諸領主の大友帰属を決定づけ、直接には思うに任せない旧家臣団の再結集に弾みをつけることを狙ったものであろう。

寺院焼き打ちの謎

石垣原合戦にかかわっては、今一つ寺院の焼き打ちがある。

『別府市誌』（昭和六〇年《一九八五》）によれば、朱湯院長泉寺（亀川）・円通山観音禅寺（平田町）・太平山宝泉寺（石垣南）の三寺が合戦で焼失したとある。同『市誌』には、長泉寺、観音禅寺にかかわっては「明治二十年丁亥五月三十一日、御越村内社寺調査帳」（神宮司祠官土屋範二）より、「縁起」を引用しているので、要点のみ転載紹介したい。

(1)**然ルニ慶長年間、兵火ニ罹リ、伽藍宝物ハ皆火中ニ焼キ尽シテ、残ルカタ、ナカリケルニ、難有哉、尊像ノミハ免カレタマヒケレバ、里人之ヲ守リテ、僅ノ苧堂ニ安置シ斎キ奉ル、**

（「朱湯山寛徳院長泉寺略縁起写」）

(2)**天正年間ヨリ、国中戦乱ノ絶ユルコトナク、就中慶長五年ノ秋大友黒田ト、石垣原ニ開戦ス、為ニ近郊ノ社寺民家ノ如キハ、兵火ノ至ラザルナク、遂ニ当山モ又、鳥有ノ破壊ノ道場トナレリ、**

（「黄檗宗円通山観音寺略縁起写」）

長泉寺の「尊像」は薬師仏であるが、これは現存し本尊として祀られている。ただ文中にもあるように「苧堂ニ安置」（苧は茅か？）したために傷みが激しく、住職が補修して現在に至っている。御越村は明治二二年亀川・内竈・野田三村合併で成立した村である。

前記資料から窺えることは、当然のことではあるが、戦闘が広く、周辺の集落や社寺をも巻き込んで展開したであろうことである。今後の研究が待たれる所である。

では前記寺院は、いずれの軍勢によって焼き打ちされたのであろうか。

速見郡の地が杵築領であったこと、「松井文書」にも、石垣原への途上に戦闘のあったという記録がないことなどを考え合わせれば、松井・黒田勢の手にかかったとするには無理がある。大友勢の手にかかったとすれば、敵軍（松井・黒田）が陣所として利用できる寺院を破却したと考えることができるが、観音禅寺は、大友縁りの寺院で、大友一二代持直主従の墓所と伝えられる石塔群があり、宝泉寺も同じく、吉弘統幸の菩提寺として現在に至っている。

なお、実相寺山麓にあったとされる実相寺は、黒田の陣所になって荒廃したとも伝えられているので、大友破却説も説得力に乏しい。当時よく見られた軽輩の兵士による略奪の被害も含め背景を考えるべきであろう。

黒田・松井勢の実相寺山・角殿山布陣

義統が立石に布陣した九月九日、義統豊後下向の報を受けた中津の黒田如水は、杵築支援の先遣隊（時枝平太夫・井上九郎右衛門ら）に出陣を命じた。

先遣隊は十日に赤根峠（国見町）を越え十二日に杵築に到着、本隊到着を待てとの黒田如水の指示にもかかわらず、十三日の払暁寅の刻（午前四時前後）に黒田勢、卯の刻（午前五時前後）は杵築勢が、共に石垣原を指して兵を進めた。途中の道路は十分に整備されていなかったようで、軍勢の移動に相当難儀した様子が『松井文書』に次のように記されている。

康之、馬を進メ候共、殊外難所ニ而果敢行不申、一騎打二歩せ申候。時枝平太夫・井上九郎右衛門等茂、難所ニ而跡勢続不申候ニ付、かんのお（鉄輪？）山と申野山之傍ニ下居申候時、康之初杵築勢追付申候。

鉄輪で合流した黒田先遣隊と杵築勢には、鉄輪～鶴見村の地勢に明るい者がいなかったらしく、松井康之は物見を出して実相寺山への道を探らせている。『松井文書』でその間の経緯をたどって見よう。

康之、桑原才蔵（従者略）江道を見候様ニト申聞候。両人は道筋ニ不構鶴見村之中ニ入候得ハ、乞食一人居申候ニ道を聞候処、いか程御人数ニ而候哉、此道空敷候ト申、一町計村はつれ迄案内仕、行方見へ不申候。三郎左衛門馳帰、此道を案内仕、実相寺山江打上申候。

この史料で松井勢が実相寺山に布陣したことが分かるが、その位置は、「康之儀者、実相寺山与大友陣を下墨仕候」とあるので、「石垣原図」にあるように、実相寺山の西南舌端の丘上付近（現別府大学明豊高校グランド位置？）であったと推定される。

黒田先遣隊の面々の布陣はどうだったのか。黒田勢は、次のような二番備の態勢を取っていた。

一番備
久野次左衛門・曽我部五右衛門
母里与三兵衛・時枝平太夫　四頭　千余人
二番備
井上九郎右衛門・野村市右衛門
後藤太郎助　三頭　千余人

（『連署状案』）

このうち時枝平太夫らの布陣については、「**時枝者山間之道を過ぎ、広野ニ一組之人数を北向ニ備を立申候**」（『松井文書』）とあるので、実相寺山と角殿山（通称ルミエールの丘）の間道を通り抜

けて前面の犬の馬場に出、それに続く原野に布陣したものと推定される。時枝は、杵築見切り出陣の仕掛け人であり、先陣をめぐって松井に異論を唱えるなど、功を焦る気配の濃厚なことが前『文書』によって散見される。

二番備・井上らの布陣については、貝原益軒の『豊国紀行』に次の一文がある。

井上九郎右衛門、野村市右衛門は、加来殿山の上、北の方低き所に、陣を取て有しが、井上一人南の高き所より、鶴見原の軍のよふ（様？）を見て、時分よしと思ひ、士卒を呼びて、野村と同じく山を下りて、敵陣に向ひ戦ふ。

杵築・黒田勢の布陣配置を「見取図」で見ると、黒田に関しては如水陣所以外に記載はない。後藤碩田模写になる「石垣原古戦場之図」（一八四九年・別府市・八幡神社蔵）には、実相寺に三ヶ所（西南・東南・北西の各突端）、角殿山の山頂に一ヶ所、「三」の印が付してある。これを布陣の印とすれば、石垣原に出ばる大友方の「少鉄炮之者」に、一番備の「四人の衆かぶかれ（欺かれ）」一戦に及んだとき、「一里も跡に」（『連署状案』）あったという井上らが、事態の急変に急遽、杵築勢と並ぶ角殿山に戦列を整えたのではないかとも考えられる。

前述の「見取図」の記載はどのようなものであろうか。次の一文がそれである。

此山上北ノ方ニ広サ／二反計ノ所アリ／如水公先手井上九／郎右ェ門野村市右／ェ門陣所ナリ

これによれば、角殿山には井上・野村らの黒田二番備勢が布陣したことになる。実相寺山に松井ら細川勢が布陣していたことを考えれば、後で到着した黒田二番備が、間道を挟んで石垣原を一望できる角殿山に布陣することは、戦略的にも正しい選択であったであろう。ちなみにこの山（約一七〇メートル・丘という方が適切）は、北側は急斜面からなり、石垣原を俯瞰できる南側と豊前街道に近接する西側は緩斜面によって形成されている。

他方、黒田如水率いる本隊も同じ九日に中津を出陣、宇佐高森（黒田孝利）、高田（竹中重信）を経て、十日には赤根峠（国見町）を越え国東郡に進出した。十一日には富来城（垣見）を包囲したが、杵築攻撃の報に接してか兵を先に進め、安岐（熊谷）をも回避して石垣原合戦の闘われた九月十三日には、頭成（日出町豊岡駅付近）に達していた。

戦場「石垣原」の実像

石垣原の当時の状況については、「松井文書」に次のように記されている。

石垣原者、南下りニ壱里之野ト申候得共、長く相見へ、実相寺山、立石間二十町茂可有之候。此野者、草短く縄を張りたることく竪横十文字ニ荊棘生し、土地の高下有之石高之地ニ而御座候。

石垣原を、史料の云うように実相寺山から立石（朝見川断層崖）間の原野とし、直接距離を見ると、山頂から大友本陣までで約二キロメートル、史料の「二十町」（一町＝一〇九メートル）という目測もほぼ当を得ている。一見広く見える古戦場も、徒歩で一時間もあれば横断できる広さであった。

この史料の語る石垣原は、筆者が別府高等小学校時代によく学校菜園用の草刈に行った場所であるが、その体験からすれば、史料の示す景観は、開発の進んでいなかった当時の石垣原の有り様とよく似ている。また伏流水の浅い所には照葉樹林が繁茂していたであろうことは、九州大学生体防御医学研究所付属病院（通称温研）構内に保存されている原生林が証明している。

したがって騎馬戦は不向きと考えられもするが、先述のように、宇佐への豊前街道へ通じる軍道が石垣原を南東から北西へと貫通

し、また実相寺山裾の間道から立石へ通じる路線も前記軍道と交錯して石垣原を貫通しているので、戦闘場面は別として、騎馬・兵員の移動はこれらの路線を利用して敏速に行われたのではないかと推測される。諸史料中にしばしば見られる騎馬での武将たちの移動がそのことを物語っている。

合戦三度

黒田・杵築勢が夜明け前に杵築を出発し鉄輪に到着したころ、大友方の「物見」はその動きを察知して、狼煙を上げて襲来を本陣に告げた。

黒田一番備（時枝ら）が実相寺の間道を通り、犬の馬場前面の石垣原に展開するころには、少数の鉄砲隊を伴った大友勢の先手は、実相寺から遠くない石垣原原野に布陣して戦闘態勢に入っていた。次の一文がそのことを物語っている。

（大友勢は）**本陣を被打出、時枝備与弓手（左）ニ見なし東向ニ備を立て、暫、野中ニ折敷杵築勢実相寺山へ打上り候を見上候**（『松井文書』）

大友勢の布陣場所は、松井の陣（標高一五〇メートル前後）から「下墨（俯瞰）」できる位置に当たり、そこに「折敷」いて杵築勢を「見上」げることが出来たのであるから、大友勢は、立石本陣から実相寺間道へ通じる道に沿って移動し、豊前街道との交差点付近（現在の南原付近？）に布陣していたものと推定される。

戦闘は、一三日「**午刻与酉中刻迄懸引三度之軍**」（同前）で、正午ころから午後六時ころまで三度にわたり、白兵戦の形で戦われたようである。「古屋文書」は「七番掛」とし、「別府市誌」（昭和六〇年刊）は、「七番掛」を原文のまま転載しているので参照されたい。

緒戦の勝者は黒田・松井勢

実相寺山麓に近いと考えられる原野に対峙した大友、時枝両軍は、弓・鉄炮の足軽を先兵に次第に接近し、杵築勢の「**弓、鉄炮茂、時枝ニ負申間敷と皆野中ニ打出**」で（以下「松井文書」による）、遂に戦端が開かれた。

実相寺山の陣に待機していた松井・有吉ら武将も急ぎ戦闘に加わった。史料は激戦の模様を次のように伝えている。

其内ニ先手ハ次第ニ詰寄あひ一町之内外ニ相成候。此躰を坂本三郎右衛門見候而只今先手ハ鑓を可仕候、是ニ御陣ハ如何と申ニ付、（中略）**直ニ麓江討下申候。康之儀茂不及是非、先手之鉄炮際ニ馬を駆付候へハ、**（有吉）**四郎右衛門馬与下り鉄炮を取申候。康之儀下立申候を見候而、宗像掃部・吉弘加兵衛等之敵百人計、大友方之鉄炮の後与三十間計之間を曳聲ニ而突懸候へハ、四郎右衛門鉄炮を以十四五間程之間ニ而放し敵を打倒申候。**

激戦はさらに続く。史料をたどろう。

康之見懸敵二十人計、鑓・薙刀ニ而打懸其を鍵鑓を以相手ニ罷成、敵を追散し首ニ討取、左之手ニ蒙疵申候（中略）（家来の）**面々何れ茂力戦仕敵を追立、大友方敗軍仕候**

しかし大友方の「敗軍」については、黒田方を誘い込む戦術的な退却とする説もある。このような見方は、次の第二戦における時枝勢の敗退のありようとも無関係ではない。

第二戦ー大友勢の追撃勝利と戦場

緒戦に大友勢を打ち破った黒田一番備・杵築松井勢のうち、時枝ら黒田勢は勢いに任せ、武将は騎馬のままで敗走する大友勢を追撃した。

しかし、大友勢は「**立石きわにて取て返し**」反撃に移る。激戦の中で黒田一番備の四将のうち「**久野次左衛門・曽我部五右衛門**」ら二将が討死したため黒田勢は「**惣敗軍ニ成**」、「**もとの実相寺山を過**」（以上「連署状案」）て逃げざるを得なかった。

他方松井勢も、大友勢追討に助勢しようとしたが、黒田二番備の井上九郎右衛門が駆けつけ「**かゝるも引くも大将の心得なり、**

不似合いふか入り沙汰の限りニ候」と引き留めたためそれに従った。

このとき時枝らに反撃したのは吉弘統幸・宗像掃部らと考えられるが、久野・曽我部らが討死にした激戦地はどの辺りであろうか。久野・曽我部らの討死した場所については、各文献史料ともに記載がなく、彼らが大友勢を深追いした状況を記しているのみである。唯一場所を記しているのは前記の「見取図」である。この地図には「忠内ケ堀」の南側、路線③＝犬の馬場～立石線に沿って三行にわたり次のように戦闘の結果を記している。

久野治左衛門討死／曽我部五右衛門モ此辺ニテ討死ス／母里與三兵衛時枝平大夫此辺マデ来敗軍ス

討死場所を特定するためには、「忠内ケ堀」の位置を先ずは検証しなければならない。

「忠内ケ堀」の位置

「見取図」の図面では、原野の立石寄りに「**忠内ケ堀**」（「見取図」⑤）という縦長の堀が黒色の輪郭線入りで描かれ、その枠内に小字二行で「**カラホリヨコ三間・長サ百余間**」との説明がされている。この数値は『大友興廃記』のそれと同数値である。

「忠内ケ堀」は、現在の何れの辺りに比定されるのであろうか。残念ながら貝原益軒かかわる「石垣原図」には「境川」が記されていないために「忠内ケ堀」の位置を特定できない。

現在、別府市教育委員会指定の戦跡は、境川朝日橋北詰め（県立青山高校校門北方）から、九大温研の南側を通り、同河川上流の南立石～鉄輪線戦場橋北詰めに通じる道路沿いに点在している。これは、「忠内ケ堀」を現境川の北側に存在したと仮定した結果であろうが、この当否を確かに判定づける文献史料は存在しない。しかし、後述するように、「忠内ケ堀」が、「温研」よりも北側、現「南原」の交差点に近い位置にあったとすれば、教育委員会指定の戦跡は、第二戦の古戦場として当を得ていると云うべきであろう。

本題にかえろう。嘉永年間の「古戦場図」（これには境川が記載されている）には、境川の北岸、場所は西にずれるが、そこに「**此辺ヨリ犬馬場ニカケテ戦地ナリ**」の一文があり、戦場を境川の北側としている。また「忠内ケ堀」の記載はないが、これとほぼ同じ位置には、ほぼ同一の長さで墨書で点線が打たれ、「**水際石カキ**」と説明が加えられている。「忠内ケ堀」の跡ではないかとも考えられる。この堀については『増補大友興廃記』に、吉弘統幸討死に関係して、次のような記述がある。

此所石垣原の南北の半の所より四丁ばかり南立石の方によりて、野中に忠内ケ堀とてから堀あり。東西長き事百間ばかり横は三間ばかり有、南は岸の高さ一間余り、下の方は堀少し曲りたる所有。

※一丁（町）＝六〇間＝一〇九メートル、四丁＝四三六メートル
百間＝一八二メートル　三間＝五、四五メートル

この記述を現在の別府市に当てはめてみると、「南北の半の所」（南北二キロメートルの中点）に境川が流れている。「忠内ケ堀」をこの線から「四丁」（四〇〇メートル強）立石寄りとすると、その位置は南立石小学校～法務局出張所の線に当たり、境川以南に当たる。なお、この史料中の「堀」の数値は「見取図」の記載と全く同じである。「見取図」作製にあたり、「増補大友興廃記」の数値を援用したものであろうか。

今少し「忠内ケ堀」の位置を探索して見よう。「見取図」では、長さ「百間」の「忠内ケ堀」を、犬の馬場～立石線と豊前街道が襷掛けに交差する位置の南側に、両路線を東西に断ち切る形で記載している。「百間」を二〇〇メートル前後とすれば、「堀」が両路線を東西に遮断できる位置は、交差点から至近の距離でなければならない。交差点を現在の南原の三差路近辺（犬の馬場南側？）

とすれば、「堀」は九大温研敷地内から、その北側の荘園町の至近の範囲内に存在したのではないかと推定される。

『豊国紀行』と「忠内ケ堀」

『豊国紀行』には、吉弘統幸の討たれた場所を「堀」とし、関連して「堀」の位置を次のように記している。

（忠内ケ堀は）**是立石村と鶴見村の境なり、（中略）久野次左衛門戦死の所より、四町斗北の方にて、敵陣（大友陣）へも漸く遠し。されど石垣原の半よりは、立石村の方に近し。**

文中の「四町」は約四四〇メートル弱であるから、久野次左衛門討死の場所を現境川付近とすれば、それより四〇〇メートル北側の位置は、先述のように温研～荘園町にあたり、「見取図」と一致する。

立石村と鶴見村（北中村と原中村に分村）の境界は判然としないが、鶴見村を「現大字鶴見の内」（『角川日本地名辞典』）とすれば、南限は現境川近辺ではなかったかと推定される。境川近岸を第二戦の久野戦死の場とする「古戦場図」の説を基に、前記『豊国紀行』の、「村境」＝「久野次左衛門戦死の所より、四町斗北の方」とする説を吟味すると、「村境」は鶴見村内深く入り込み実態にそぐわない。また「石垣原図」の問題点も既述のとおりである。

これらの点から考えると、『豊国紀行』の石垣原合戦に関する記述は、貝原益軒が親しく石垣原古戦場を踏査して書いたとするには、少なからず整合性に欠けると言わざるを得ない。また「石垣原図」と「豊国紀行」の記述の相関関係の希薄なことも論を待たないであろう。

以上「忠内ケ堀」について見てきたが、その位置は温研北方至近距離の範囲内と推定はされるものの、それを裏付ける確たる証拠もないこと故、引き続き検証を重ねなければならないであろう。

＊境川の当時の流路は『石垣原合戦絵図』（大分大学附属図書館蔵・製作時期不明）では、二ないし三筋の流れが交錯して描かれおり、南石垣から上流の到る所に、川を挟んで「水際石垣」を示す点線が記されていることから、出水などによりしばしば流路に変動があったことを窺わせる。

＊九大生体防衛医学研究所付属病院（通称温研）の所在地は大字鶴見字鶴見原で、敷地内には古戦場と伝えられる原野（院内では温研山と呼称）が保存されている。

勝敗を決した第三戦

第三戦は、敗走する黒田一番備（時枝軍）を追走する大友軍（吉弘・宗像勢）が実相寺直近まで迫り、これを迎え撃つ黒田一番・二番備及び杵築松井軍との間で戦われた。『松井文書』でその経過をたどって見よう。

（実相寺へ引く）**道ニ而左之向ニ人数相見へ候ニ付、坂本三郎右衛門江尋候ハ、中津勢ハ右江敗軍仕候間大友勢ニ而可有之由申候。何レ茂歩武者ニ而候ハ三郎右衛門申候通ニ而可有之ト申候。是者宗像掃部・吉弘加兵衛等百五十計、（中略）実相寺山之昇（幟）を見懸、本陣ト存進寄申候。**

これを見ると、第三戦は、第二戦の勝利に勢いづいた大友勢主力（宗像・吉弘ら）が、追撃の手を緩めず実相寺山麓に迫ったことから火ぶたが切られたことが分かる。間、髪を入れず激戦が展開されたようで、松井康之主従が実相寺山麓に着いた途端に銃撃戦が始まり、山上陣地に上った康之主従が「**爰ケ所我墓所ト誓言ヲ立**」て山を下り始めるや、凄まじい銃弾の嵐が一行を見舞った。史料は「**康之ハ山八分目下候ハ吉弘・宗像手与鉄炮を雨能如く足本ニ放懸申候**」とその様子を伝えている。

第三戦の戦場は、実相寺山麓で戦われた。大友、松井、黒田勢の総力を挙げた戦いを、康之は次のように綴っている。

初与昇（旗）を建置（実相寺山松井陣）**候ハ、敵方者多人数**

ト心得、吉弘・宗像深入仕候得共、続候勢茂無之、（中略）康之陣取候山下ニ古畠之土手三十間計有之候、此陰ニ二十四五騎駆参下立候へハ、吉弘・宗像者能相手ト心得、間壱町程与急き土手限ニ近付曳声を揚、一烟蹴立突懸り申候。野村市右衛門手之大勢一度ニ着、互ニ相戦、吉弘方勝軍ト見へ候処、又、井上九郎右衛門手与六七騎駆参古畠ニ乗上、各下立、横鑓ヲ入、大友方被突立、吉弘加兵衛討死仕、宗像掃部深手を負申候。

この史料によれば、吉弘統幸ら大友勢は、一旦は実相寺山の松井陣に攻撃をかけるが、多勢と見て麓の黒田勢に矛先を向けてこれを圧倒した。しかし黒田二番備の野村勢が救援に駆けつけ、さらには同じ井上勢も参戦、加えて松井勢も山上から激しく銃撃を加えたので、吉弘・宗像ら主だった大友方の武将は討たれ、石垣原の合戦は終止符を打った。

吉弘統幸の討死に関しては、場所は「忠内ケ堀」とする史料がほとんどで、死に様も多様に伝えられている。『増補大友興廃記』の一文を紹介しておこう。場所は「忠内ケ堀」

吉弘声を懸け井上殿か珍しや、吉弘加兵衛に候へば、尋常に参会すべし（中略）、井上之を見て能敵と思ひ、十文字の鑓を以て駆向ふ。（中略）九郎右衛門の運や強かりけん。吉弘が突ける鑓九郎右衛門が胸板に幾度も当たりて、鎧の所々切るばかりなれども鎧の上なれば通らず、井上の鑓吉弘の内甲に突き入りけるに、十文字の横手に左の頬先をしたたかに懸るに、加兵衛の冑の忍の緒切れて冑顔にをりて目を覆えば、（中略）能時と井上歓び思ひて突しかば、左の脇の下に深く突入りたり。（中略）井上見方に下知して追懸けさせる。後藤左門が家人小栗治右衛門と云ふ者何の苦もなく突倒し首を取る。

（場所は「忠内ケ堀」（『郷土戦史の研究』第一輯）

場所に関しては、この松井康之の記録に記された実相寺山麓またはこれに近い場所とするのが正しいであろう。ただここで注目されるのは、「忠内ケ堀」にしろ「古畠」にしろ、「土手」にあたる場所が主戦場になっていることである。若し「忠内ケ堀」の位置を南原交差点付近とすれば、「古畠之土手」は「堀」の土手と考えられらくもない。交差点は、松井陣の設営された実相寺山南西の丘と、黒田勢の拠った角殿山の双方から俯瞰できる直近の距離（約三〇〇メートル）に当たるからである。

松井康之は、戦いの終わりを次のように伝えている。

康之陣取前ニ魚住市正組之御鉄炮并康之鉄炮茂一列ニ備、見下候而敵を打せ申候処、手負・討死多、大友方敗軍仕候。中津勢労れ候故、一町計追討四五人討取引入申候。午刻与酉中刻迄懸引三度之軍ニ御座候。

午の刻は正午ころ、酉の中の刻は午後六時に当たり、合戦は約六時間、三度にわたり石垣原で戦われたのであった。なお「連署状案」は「合戦」を二度としているが、その内容は「松井文書」と同じである。参考までに掲載しておこう。

両度之合戦ニ宗像掃部鎮続・吉弘加兵衛・其外歴々八十余討取、鑓をも差出程之者ハ相果申候条（後略）

大友義統降伏と戦後処理

一三日、合戦が松井・黒田勢の勝利の内に終わったころ、黒田如水の本隊は日出頭成にありここで勝報を受けた。実相寺に到着した黒田如水は、一四日軍議を開き、大友方武将の首実検の後立石攻略戦術と降伏勧告を議定した。しかし、それに先立ち大友義統は降伏の意を固め、黒田方武将母里太兵衛のもとに田原紹忍を派遣して仲介を依頼した。その日の夕刻、義統は部下一〇名と共に実相寺山の如水の本陣に出頭、ここに石垣原合戦は最終的な決着を見たのである。

他方、肥後熊本の加藤清正は、松井・黒田支援のため一四日に内

牧へ、一五日には阿蘇郡小国に到着したが、ここに松井の軍使より勝報がもたらされ熊本へ引き揚げた。このとき先遣隊はすでに両筑街道を鳥居～堀田間（旗の台）にまで達していたとの説もある。

黒田の軍門に降った義統は、中津を経て大坂の黒田長政（如水の嫡子）の元に移送され、如水らの嘆願により、常陸宍戸に幽閉され、一六〇五年その地で波乱の生涯を閉じた。

竹田の中川を裏切り義統に従軍した田原紹忍は、合戦後に遁走し、人を介して中川に謝罪したが、条件とされた臼杵の太田攻略に参戦して佐賀関で戦死したという。生涯人望のなかった人物のようで、「清正勲績考」には、次のようにその死に様が酷評されている。

紹忍実に忠義の志ありて死したらんか、然れども平生の所業あしき人なれば、之を信ずるに足らず、吉弘・宗像と共に死することあたわずんば、せめて中川に逢て所在を語り、即時に自殺せば少しは可ならんに、今や空しく流矢に中り死しけるは嘆かわしきことに非ずや、定めて邪法の根本なれば神仏の冥罰なるべし。

（「大分県史」中世編Ⅲ）

六　関が原の戦後の二豊新大名の配置

石垣原の合戦の終わった翌九月一四日、美濃関が原では天下分け目の戦いが展開され、これも一日で決着し徳川家康の覇権が確立した。戦後の処理は苛酷を極め、改易（所領没収）された大名は九〇家・約四三八万石、減封四家・約二二一万石にのぼり、新たな大名配置が強行された。大分県域二豊の大名異動は次のようであった。

＊大名異動（関が原合戦後）△→入封　▲→除封（改易）

一六〇〇年

《豊前》△中津　黒田長政筑前福岡へ

△〃　細川忠興丹後宮津より（三九万九〇〇〇石）

《豊後》▼安岐（国東）熊谷直陳（一万五〇〇〇石）除封

▼富来（国東）垣見家純（二万石）〃

▼府内（大分）早川長政（二万石）〃

▼臼杵（海部）太田一吉（六万五〇〇〇石）〃

△臼杵（海部）稲葉貞通（五万石）

美濃八幡より　入封

一六〇一年

《豊後》△日出（速見）木下延俊（三万石）播磨より〃

△府内（大分）竹中重利（二万石）高田より〃

△佐伯（海部）毛利高政（二万石）

日田（隈府）より〃

△森（玖珠）来島長親（一万四〇〇〇石）

伊予来島より

本稿は、平成一四年九月刊『大分県地方史』（第一八六号）にすでに掲載したものであります。

この度、同研究会（豊田寛三会長）の特別のご厚意により、別府史談会会員のために「転載」を許されました。ここに厚くお礼を申し上げます。

（編集部）